

筑後国府跡

— 第277次発掘調査報告 —



平成27年(2015)3月
久留米市教育委員会

序

久留米市は、筑紫平野の中心に位置し、古くから水路と陸路の要衝としての位置を占めてきました。このため市内には、先人達の残した多くの文化遺産が存在します。

今回の調査では、奈良時代の官人にかかわる遺物や遺構を検出し、当時の筑後国府の様相を解明する資料を得ることができました。この成果を生かして、今後の久留米市の市民文化や教育の発展に貢献できることを願っております。

また、発掘調査に際して多大なご協力をいただきました地権者ならびに周辺住民の皆様にご心より御礼申し上げます。

平成27年 3月31日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は、宅地造成に先立ち、平成26年度に■■■■氏の委託を受けて実施した、筑後国府跡第277次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の江頭俊介が担当した。本書に掲載した遺構実測図の作成は、江頭と石橋栄治、山口誠也が行い、浄書は「遺構くんcubic」で作成した。遺物の実測は丸山裕見子と江頭が行い、浄書は江頭が行った。
3. 遺構写真は、マミヤR867を用いて江頭が撮影した。遺物写真撮影はニコンデジタルカメラD700を用いて、久留米市埋蔵文化財センターにおいて、江頭が行った。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
4. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を基に作成し、図面の方位は全て座標北を示す。
5. 本書に使用した遺構の略記号は、S A－柵列、S B－掘立柱建物、S D－溝、S K－土坑、S P－ピットを示す。
6. 出土遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
7. 本調査の略記号はT K H－227、調査番号は201403である。
8. 本書の執筆・編集は江頭が行った。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	16

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。平成26年3月18日、[]氏より、久留米市合川町402-1、405-1における「埋蔵文化財包蔵の有無について」の照会が提出された。当該地一帯は、周知の遺跡である筑後国府跡内にあたり、今回の調査地においても、奈良時代から鎌倉時代の遺構が残存している可能性があると考えられたため、同年3月20日、発掘調査が必要である旨回答した。また同年3月18日[]氏より、発掘調査の依頼が提出され、それを受けて久留米市長植原利則と[]は、同年4月9日埋蔵文化財発掘調査にかかる委託契約を締結した。久留米市教育委員会は同年4月23日より、発掘調査を開始し、同年5月26日に発掘調査を終了した。その後、平成27年3月31日まで整理作業と報告書の作成を行った。調査面積は129㎡である。

2. 調査の体制

調査委託者：[]

調査主体：久留米市教育委員会 教 育 長：堤 正則

調査総括：市民文化部 部 長：野田秀樹

次 長：竹村政高

文化財保護課 課 長：園井正隆

課長補佐：宮崎俊一 白木 守（兼課主査）

事務主査：塚本映子

庶務担当：豊福早苗

調査担当：江頭俊介

整理担当：古賀和子、丸山裕見子

発掘調査臨時職員

青木 佐智子、石橋 栄治、石橋 康子、石橋 良一、鐘江 清、溝上 国男、御手洗 久直、

山口 誠也、山下 洋子

発掘調査整理臨時職員

石橋 洋子

3. 調査の目的と経過

調査地は筑後国府跡の内にあり。国司館やⅡ期国庁の東側にあたり、奈良時代から平安時代の官人の居住地や官衙が存在する可能性がある。当該期の遺構の状況を確認することを目的として調査を行った。平成26年4月23日、重機の搬入等の準備を行い、翌24日より重機による表土剥ぎを行った。地表から50～80cmほどは現代の耕作土であり、その下には、黄褐色の地山が検出された。各遺構の調査・記録を行い、同年5月22日に調査区全体の写真撮影を実施して、同年5月26日に発掘調査を完了した。遺構実測はトータル・ステーションで行い、「遺構くんcubic」で編集した。記録写真は、カラーリバーサル・モノクロ6×7判で撮影した。

II. 位置と環境

久留米市は、九州の北部、筑後川の中流域にあたり、筑紫平野の中央部に位置する。古代においては筑後国府や国分寺が置かれ、筑後国の政治・経済・文化・宗教の中心を占めた。近世には、毛利氏、田中氏の代を経て、有馬氏二十一万石の城下町として栄えた。近代は軍都として、また繊維産業とゴム産業の街として栄え、現在まで県南の中核都市として発展している。

本調査地は、久留米市の中央に位置し、耳納連山の西端に突き出た高良山付近からにあたる。北側は段丘崖を形成しており、その先には筑後川と周辺の氾濫源がある。

筑後国府跡は、この低台地の先端に、東西1.5km、南北600mを占め、西は高良川から、東は久留米インター付近まで、北は筑後川、南は水縄断層崖によって限られている。水縄断層崖から湧き出る水源を利用して、縄文時代早期から生活の舞台となっており、断層上の横道遺跡、断層下の朝妻遺跡、低地の西小路遺跡など縄文時代の遺跡がある。

弥生時代には高良川右岸の古宮地区に弥生終末期からの拠点集落とみられる古宮・大林遺跡があり、古墳時代前期に終焉を迎え、中期の遺構はない。古墳時代後期の6世紀末には枝光地区に堅穴住居がみられ、国府中央の流路などでは、7世紀代の遺物が出土している。近世初頭に書かれた高良大社大祝家の文書『高良玉垂宮神祕書（高良記）』によれば、高良山の神官の祖先は物部氏である。物部氏は6世紀の磐井の乱（527）で磐井を滅ぼした後に北部九州各地に定着した。当地の古墳時代後期に残された遺構は、高良山周辺に入植した物部氏による所産であろうか。いまだ明らかではない。

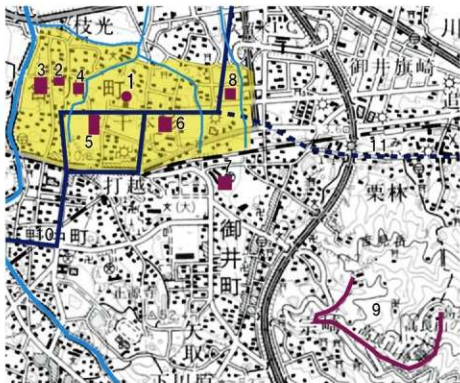
7世紀中頃～後半にかけては、「前身官衙」または「先行官衙」と呼んでいる大型の掘立柱建物群や、堅穴住居が建ち並び、一般の集落とはかけ離れた特異な様相をみせる。これらの施設群は、西を高良川、東を流路（東限大溝と呼ぶ）、北を二本の堀によって取り囲まれており、そのうちの南側の堀（北限大溝）には土塁もあった可能性が指摘されている。白村江の戦いの前後に高良山神籠石や上津土塁とともに造営された對外防衛のための軍事拠点とする見方が有力である。

7世紀末の浄御原令施行前後に筑後国が分国されたとみられ、時を同じくして古宮地区に南北170m、東西100m以上の築地塀を伴った方形区画とその内部に大型の掘立柱建物群が造営される。これをⅠ期国庁としている。8世紀中頃には、この官衙から東方130m地点に、南北約80m、東西約60mの築地塀を伴う方形区画が現れ、9世紀前半には礎石建物に代わる。これをⅡ期国庁としている。この官衙からさらに東方460m地点に、南北約130m、東西約150mの溝を有する方形区画があり、11世紀末ごろに廃絶する。これをⅢ期国庁としている。この後さらに南東300m地点に12世紀の大型掘立柱建物群が存在し、これをⅣ期国庁としている。

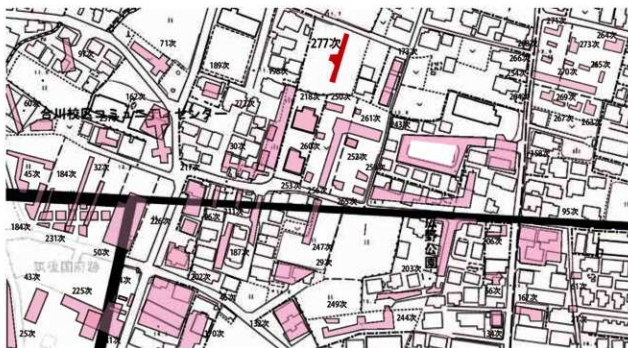
本調査地は、Ⅱ期国庁とⅢ期国庁の間の立石地区に位置し、12～14世紀の居館とされる立石土塁の外側（東側）に隣接している。8～9世紀においては官人層の居住域や曹司として機能していたと考えられている地区である。これまで周辺では多くの調査が実施されており、断片的ながら8世紀から中世にかけての当地の地割や建物の変遷が分かりつつある。

遺 跡 名

1. 筑後国府跡
第277次（本調査区）
 2. 前身官衙
 3. I期国庁
 4. II期国庁
 5. 国司館跡
 6. III期国庁
 7. IV期国庁
 8. ヘボノ木遺跡
 9. 高良山神籠石
 10. 官道
 11. 伝馬道
- 黄色：当初の国府域



第1図 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 筑後国府跡第277次調査区位置図 (1/2,500)

Ⅲ. 調査の記録

1. 検出遺構

今回の調査では、古代の柵列1列、掘立柱建物2棟、溝6条、土坑1基、土壇墓1基、その他ビットを検出した。

柵列

S A 101 (第3・4図)

調査区中央で検出した長さ4.7m以上の柵列である。調査区内でこの柵列を構成するビット4基を検出している。軸はN-83°-Wである。北側に隣接するS B 100、S D 22と軸方向を同じくし、一連の施設であると考えられる。S B 100建物の南面に位置することから、目隠し堀と判断できる。柵列を構成する最も西側のビットS P 40から8世紀後半の須恵器の円面硯が出土している。

掘立柱建物

S B 100 (第3・4図)

調査区中央で検出した2間以上×2間以上の掘立柱建物である。軸はN-7°-Eである。東側に隣接するS D 22、南側に隣接するS A 101と軸を同じくし、一連の施設と考えられる。柱間は、東辺が1.9m+2.1m、南辺が1.9m+1.9mである。S D 28より先行し、S K 37より後出する。最も西側のP 5から8世紀代の須恵器環が出土している。

S B 102 (第3・4図)

調査区中央で検出した3間以上×3間の東西棟とみられる掘立柱建物である。軸はN-6°-Eである。柱間はすべて1.5mである。軸方向は北側のS B 100と似るが、近接しており、同時併存か否かは判断しかねる。8世紀代の須恵器と土師器が出土している。

溝

S D 9 (第3図)

調査区北側で検出した長さ3.0m以上、幅0.5m、深さ0.2mの溝である。平面形状は直線的で、断面形状は逆台形を呈す。軸はN-73°-Wである。溝底面のレベルは、東側から西側に向かって僅かに傾斜する。土師器、陶器など12世紀以降の遺物を含む。

S D 18 (第3図)

調査区北側で検出した長さ3.0m以上、幅1.0m、深さ0.6mの溝である。平面形状は北側に湾曲し、断面形状は逆台形を呈す。軸は、N-81°-Wである。溝底面のレベルは、東側から西側に向かって僅かに傾斜する。S D 22より先行する。土師器、白磁、石鍋、鉄滓など11世紀前半～中頃の遺物を含む。

S D 22 (第3図)

調査区中央で検出した長さ6.4m以上、幅0.3m、深さ0.2mの溝である。軸はN-7°-Eである。西側に隣接するS B 100、南側に隣接するS A 101と軸を同じくし、一連の施設と考えられる。平面形状は直線的で、断面形状は丸みを帯びた逆台形を呈す。溝底面のレベルは、ほぼ水平である。8世

紀後半の土師器の唾壺とみられる特異な遺物が出土している。S D18より先行する。

S D28 (第3図)

調査区中央で検出した長さ3.2m以上、幅1.2m、深さ0.25mの溝である。平面形状は直線的で、断面形状は丸みを帯びた逆台形を呈す。軸はN-81°-Wである。溝底面のレベルは、東側から西側に向かって僅かに傾斜する。S D22、S B100より後出する。土師器小皿、白磁など11世紀中頃の遺物を含む。

S D48 (第3図)

調査区南側で検出した長さ3.1m以上、幅0.6m、深さ0.25mの溝である。平面形状は直線的で、断面形状は丸みを帯びた逆台形を呈す。軸はN-83°-Wである。溝底面のレベルは、ほぼ水平である。12世紀以降の遺物を含む。

S D52 (第3図)

調査区中央で検出した長さ1.7m以上、幅0.4m以上の溝である。平面形状は直線的で、断面形状は逆台形を呈す。軸は、N-13-Eである。8世紀後半の遺物を含む。ピット群に先行する。S B102より先行する。

土坑

S K37 (第3・5図)

調査区中央で検出した長軸長4.1m、短軸長2.8mの不正楕円形の土坑である。深さは1.0mを測る。断面形状は緩やかな逆台形をなす。8世紀中頃の遺物を含む。南東側から階段状に降りていくような形状をとっている。埋土下層は、地山由来の黄褐色土が流れ込んでおり、長期間開放状態にあったことがうかがえることから、水溜や水汲み遺構の可能性はある。

土墳墓

S T15 (第3・5図)

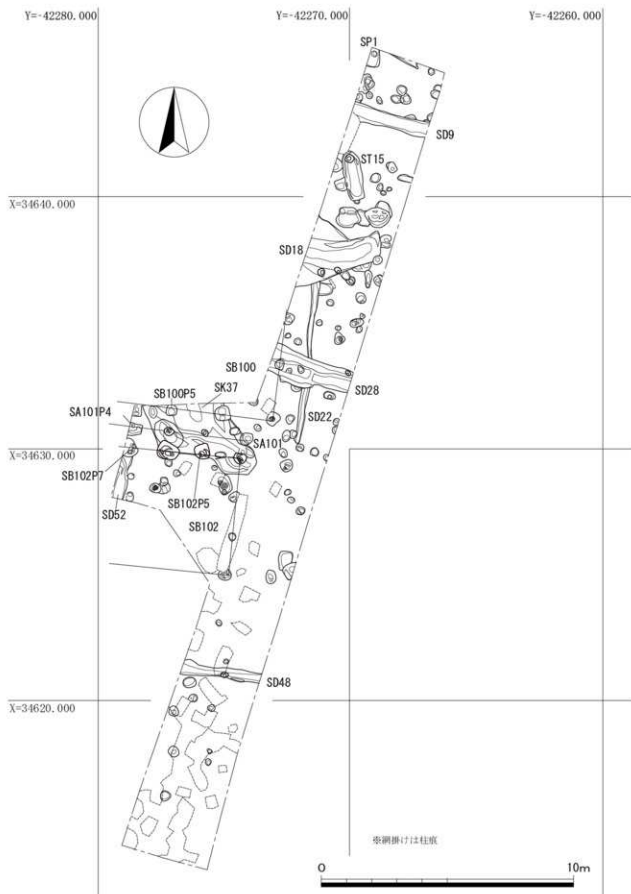
調査区北側で検出した長軸1.9m、短軸0.75mの隅丸方形の土墳墓である。深さは、0.3mを測る。断面形状は逆台形をなす。軸はN-10°-Wである。10世紀後半～11世紀初頭の完形の土師器碗、刀子などが出土しており、副葬品と考えられる。

2. 出土遺物

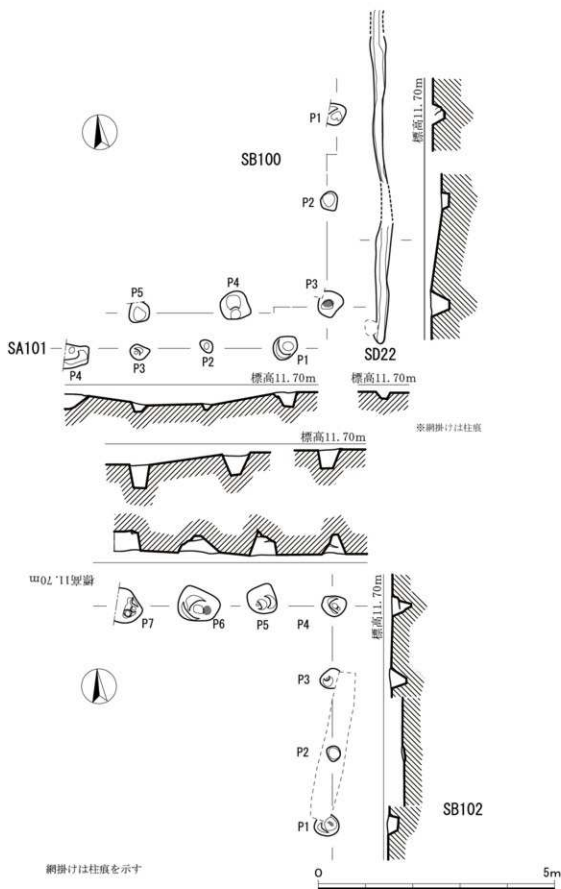
8世紀から12世紀の遺物、パンコンテナー2箱分が出土した。特筆すべき遺物について簡単に述べる。詳細は第1表の出土遺物観察表を参照願う。

1は、S A101の西端のP 4から出土した須恵器の円面硯である。胎土は赤みを帯びており、焼成がやや甘いように見受けられる。長方形の透かしが付く。

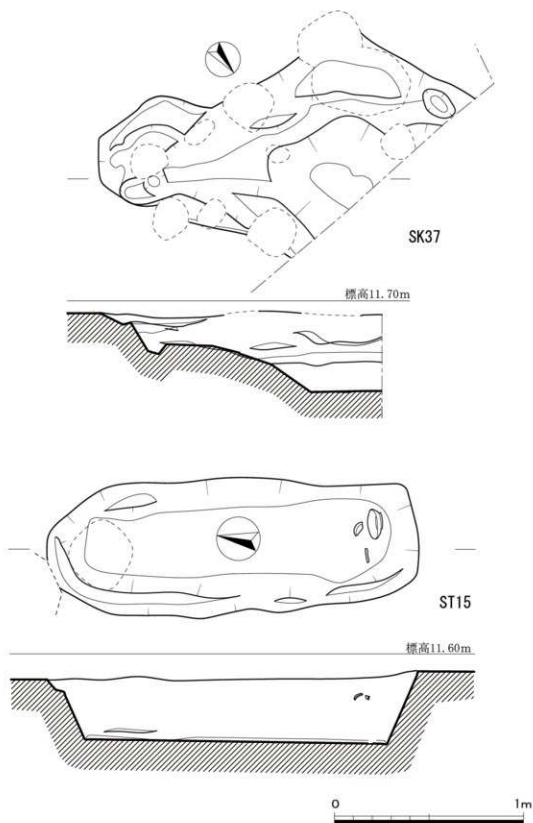
22は、S D22から出土した土師器である。上半部は高坏のように直線的に開く朝顔形を呈しており、下半部は碗である。碗部の胴部外面下端は回転ヘラ削りを施し面取りをしている。管見の限り類例をみないが、唾壺を模したものと考えられる。



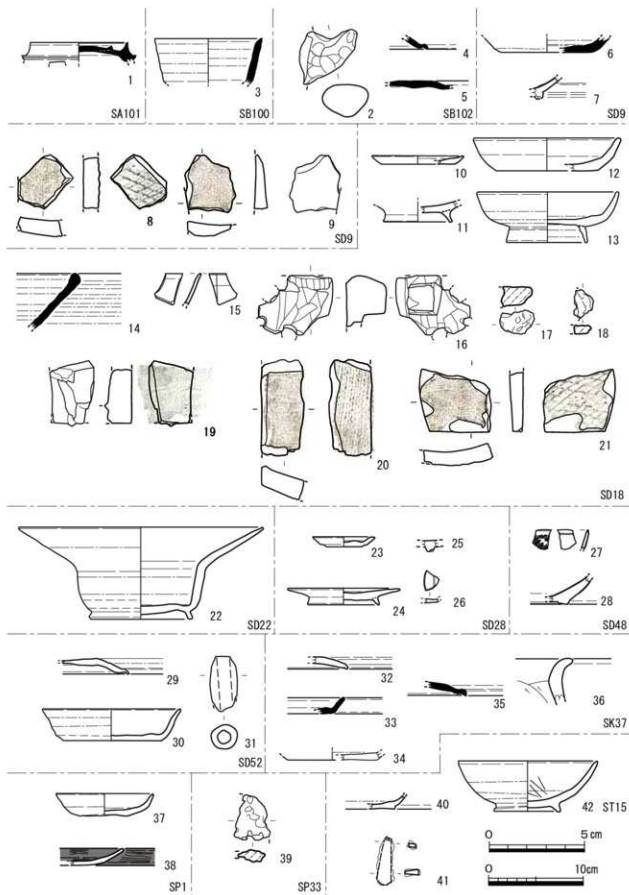
第3図 筑後国府跡第277次調査遺構配置図 (1/150)



第4図 SB100・SA101・SB102実測図 (1/80)



第5図 SK37・ST15実測図 (1/50・1/20)



第6図 出土遺物実測図 (1/2・1/4)



第7図 SA101完掘状況（東から）



第8図 SB100完掘状況（東から）



第9図 SB102完掘状況（東から）



第10図 SD9完掘状況（南から）



第11図 SD18完掘状況（東から）



第12図 SD28完掘状況（東から）



第13図 SD48完掘状況（西から）



第14図 SD52完掘状況（北から）



第15図 SK37完掘状況（南から）



第16図 SK37完掘状況（東から）



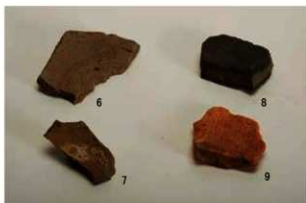
第17図 ST15遺物出土状況（北から）



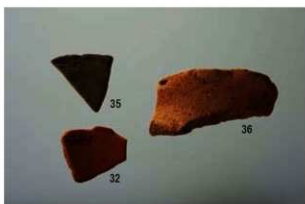
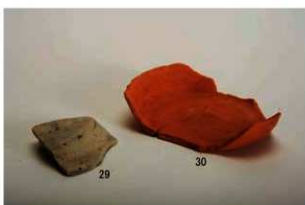
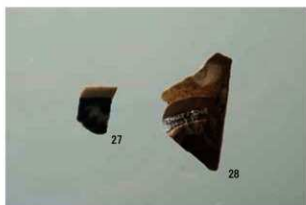
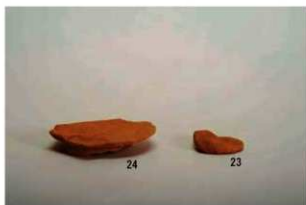
第18図 ST15完掘状況（西から）



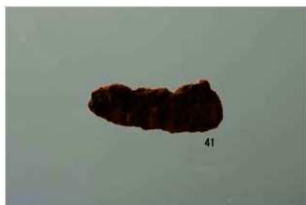
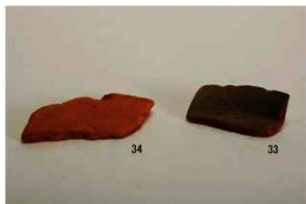
第19図 調査区全景（北東から）



第20図 出土遺物写真 1



第20図 出土遺物写真 2



第20图 出土遺物写真3

第1表 出土遺物観察表

通物地	出土遺物	種別	器種	法 量			色 質		図 形・文様		胎 土	備 考	登録番号
				口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	外面	内面	外面	内面			
1 第6-20区	SA101 -P4	須恵器	円面碗	[12.0]	-	(2.0)	黄灰	黄灰	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	精良(0.5mm白色、黒色、赤色粒子)	内面破部内埋	201403 -000034
2 第6-20区	SB102 -P5	土師器	把手	6.8	4.8	3.4	にぶい黄橙	-	ナデ・オサエ	-	微砂粒		201403 -000032
3 第6-20区	SB100 -P6	須恵器	杯	[11.2]	-	(4.8)	灰	オリーブ灰	ヨコナデ	ヨコナデ	精良(1mm白色、黒色粒子)		201403 -000033
4 第6-20区	SB102 -P7	須恵器	蓋	-	-	(1.3)	灰	灰	ヨコナデ	ヨコナデ	精良(1mm黒色粒子)		201403 -000035
5 第6-20区	SB102 -P7	須恵器	蓋 (転用碗)	-	-	(0.9)	灰	灰	ヘラケツリ ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	精良(1mm白色粒子)	内面内埋	201403 -000036
6 第6-20区	SD9	須恵器	壺	-	[9.6]	(1.5)	灰黄	灰黄	糸切り・ナデ	回転ナデ	微砂粒		201403 -000004
7 第6-20区	SD9	陶器	碗	-	-	(2.2)	にぶい黄 (軸)	黄灰(黄地)	ヘラケツリ 施軸	ナデ・施軸	微砂粒	口縁欠	201403 -000003
8 第6-20区	SD9	瓦	平瓦	(5.7)	(5.8)	1.7	黄灰	-	布目	斜格子タタキ	微砂粒	重:51.7g	201403 -000005
9 第6-20区	SD9	瓦	平瓦	(6.0)	(5.4)	1.4	橙	-	布目	欠損	微砂粒	重:33.9g	201403 -000006
10 第6-20区	SD18	土師器	小皿	[9.6]	[7.6]	(0.9)	橙	橙	ヘラ切り ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	微砂粒(赤色粒子)		201403 -000012
11 第6-20区	SD18	土師器	碗	-	[7.0]	(2.2)	浅黄橙	浅黄橙	ヘラ切り ヨコナデ	摩耗	微砂粒(赤色粒子)		201403 -000011
12 第6-20区	SD18	土師器	杯	[15.6]	[10.6]	(3.5)	にぶい橙	にぶい橙	ヘラケツリ・ヘラ ケツリ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	微砂粒(赤色粒子)		201403 -000010
13 第6-20区	SD18	土師器	碗	[15.0]	8.4	(5.4)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヘラ切り ヨコナデ	ヨコナデ	微砂粒(赤色粒子)		201403 -000016
14 第6-20区	SD18	須恵器	鉢	-	-	(5.8)	灰白	灰白	ヨコナデ	ヨコナデ	微砂粒		201403 -000013
15 第6-20区	SD18	白磁	碗	-	-	(3.3)	灰白(軸)	灰白(黄地)	幾手匠線画	ナデ	精良	X1型?	201403 -000017
16 第6-20区	SD18	石製品	石鍋	-	-	(5.3)	黄灰	黒褐	ケズリ	ケズリ	-	痕石	201403 -000015
17 第6-20区	SD18	鉄	鉄滓	3.6	2.5	2.1	灰	-	-	-	-	鋼形 重:26.9g	201403 -000018
18 第6-20区	SD18	鉄	鉄滓	3.0	2.2	1.0	暗褐	-	-	-	-	重:5.4g	201403 -000021
19 第6-20区	SD18	瓦	丸瓦	(7.0)	(4.6)	2.5	黄灰	-	布目	縦紋タタキ(銅 目)→ナデ	微砂粒	重:156.2g	201403 -000014
20 第6-20区	SD18	瓦	平瓦	(10.2)	(4.5)	2.1	灰	-	布目	縦紋タタキ(銅 目)→ナデ	微砂粒	重:100.3g	201403 -000019
21 第6-20区	SD18	瓦	平瓦	(6.6)	(7.6)	1.6	灰白	-	布目	斜格子タタキ	微砂粒	重:78.4g	201403 -000020
22 第6-20区	SD22	土師器	唾壺	26.0	10.8	9.7	橙	橙	ヘラ切り 回転ナデ	回転ナデ ナデ	細砂粒(黒色粒子)	丹塗	201403 -000042
23 第6-20区	SD28	土師器	小皿	[6.6]	3.6	(1.0)	橙	橙	ヘラ切り ヨコナデ	ヨコナデ	微砂粒		201403 -000023
24 第6-20区	SD28	土師器	押付皿	[11.8]	[7.3]	(1.7)	橙	橙	ヘラ切り ヨコナデ	ヨコナデ	微砂粒(赤色粒子)		201403 -000022
25 第6-20区	SD28	緑釉陶器	碗	-	-	(1.2)	淡黄(軸)	灰白(黄地)	摩耗	摩耗	精良		201403 -000025
26 第6-20区	SD28	白磁	皿	-	-	(0.5)	灰白(軸)	灰白(黄地)	ケズリ	沈線あり	精良		201403 -000024
27 第6-20区	SD48	染付	碗	-	-	(2.0)	灰白(軸)	にぶい橙 (黄地)	不明	線	微精精良		201403 -000038
28 第6-20区	SD48	陶器	碗	-	-	(3.0)	灰オリーブ (軸)	灰白(黄地)	ケズリ	ナデ	精良(0.5mm赤色粒子)		201403 -000037
29 第6-20区	SD52	土師器	蓋	-	-	(2.0)	灰白	灰白	ヘラケツリ ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	砂粒(1~2mm黒色、白 色粒子)		201403 -000040
30 第6-20区	SD52	土師器	杯	14.6	10.3	3.4	橙	橙	ヘラケツリ・ヘラ ケツリ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	細砂粒(1mm黒色粒子)		201403 -000039
31 第6-20区	SD52	土製品	土鍋	(5.8)	2.8	2.6	にぶい黄橙	-	ナデ・オサエ	-	細砂粒(1mm白色粒子)		201403 -000041
32 第6-20区	SK37	土師器	蓋	-	-	(1.2)	橙	橙	ヘラケツリ ヨコナデ	ヨコナデ	微砂粒(赤色粒子)		201403 -000027
33 第6-20区	SK37	須恵器	杯	-	-	(1.8)	灰黄	灰黄	ヘラ切り ヨコナデ	ヨコナデ	微砂粒		201403 -000031
34 第6-20区	SK37	土師器	壺	-	[9.6]	(0.9)	橙	橙	ヘラ切り ヨコナデ	ヨコナデ	微砂粒		201403 -000028
35 第6-20区	SK37	須恵器	蓋	-	-	(1.4)	灰黄	灰黄	ヘラケツリ ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	微砂粒		201403 -000030
36 第6-20区	SK37	土師器	壺	-	-	(4.5)	浅黄橙	浅黄橙	ヨコナデ	ヨコナデ・ケズリ	砂粒(石画)		201403 -000029
37 第6-20区	SP1	土師器	皿	[10.2]	6.7	(2.4)	橙	黄橙	ヘラ切り(飯田 ヨコナデ)	ヨコナデ・ナデ	微砂粒(赤色粒子)		201403 -000031
38 第6-20区	SP1	黒色土器B	皿	-	-	(1.8)	褐灰	褐灰	ヘラケツリ ミガキ	ミガキ	微砂粒		201403 -000002
39 第6-20区	SP33	鉄	鉄滓	4.8	3.7	1.3	暗褐	-	-	-	-	鋼形 重:23.1g	201403 -000026
40 第6-20区	ST15	土師器	皿	-	-	(1.5)	橙	橙~黄橙	ヘラ切り ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	微砂粒(赤色粒子)		201403 -000009
41 第6-20区	ST15	鉄器	刀子	5.1	2.0	0.8	暗褐	-	-	-	-	重:11.9g	201403 -000008
42 第6-20区	ST15	土師器	碗	14.6	7.0	5.3	明黄橙	にぶい黄橙 ~黄灰	ヘラ切り・横 ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	微砂粒(赤色粒子)		201403 -000007

IV. 総括

今回の調査で検出された遺構の中で最も先行するものは、SK37である。埋土の下層は地山が流れ込んだとみられる黄褐土であり、一定期間開口状態のまま放置されたのちに埋め戻されたと考えられる。

次にSK37を埋め戻した後に建設されたとみられるSA101、SB100、SD22、SB102は、軸方向を同じくしている。SA101、SB100、SD22は目隠しの柵列と建物と雨落ち溝であると考えられ、一連の施設と判断できる。この施設とSB102は距離が近く、同時期に建っていたのか不明であるが、軸方向や出土遺物から、大きな時期差はないものと考えられる。これらの建物の時期は遺物から8世紀後半とみられ、同様の軸方向をとる建物群が周辺で検出されている（218次SB100、247次SB62）（第23図中央）。今回出土した土師器の唾壺や須恵器の円面硯などから、官人が使用した建物群と考えられ、建物の構造や規模から居宅であると判断する。

調査区北側で検出された土墳墓ST15は、副葬品と考えられる土師器 碗ら、10世紀後半の年代が得られる。同様の時期の土墳墓が、調査区以西一帯の上地区の官衙群や三丁野地区のⅢ期国庁の周辺および内部に検出されており、当地一帯の遺構の変遷についてより一層の検討を要すると考えられる。12世紀以降の溝SD9、SD28は立石土塁と直交する軸方向をとっており、条里を基軸にした当時の本調査区一帯の地割りの一部を成すものと考えられる。



第23図 調査区周辺の遺構変遷図 (1/1000)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちくごくふあと だい277にはつくつちようさほうこく							
書 名	筑後国府跡 ― 第277次発掘調査報告 ―							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第353集							
編著者名	江頭 俊介							
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課							
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 Tel. 0942-30-9225 FAX 0942-30-9715 Email: bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp							
発行年月日	平成27 (2015) 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
筑後国府跡 第277次調査	久留米市合川町 402-1、405-1	市町村	遺跡番号	33° 18' 58"	130° 32' 37"	20140424 ～ 20140526	129㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特 記 事 項	
筑後国府跡 第277次調査	官衙	奈良 平安	欄列 掘立柱建物 溝 土坑 土壇墓 ピット	1列 2棟 6条 1基 1基	土師器・須恵器		8世紀後半の官人層の居宅とみられる建物が検出され、円面硯や土師器の唾壺などが出土した。	
要 約								
本調査地は筑後国府のほぼ中央にあり、官人層の居住域や曹司の可能性のある地域である。今回の調査では8世紀後半の官人層の居宅とみられる建物が検出され、円面硯や土師器の唾壺などが出土した。								
土木工事の届出日			平成26年3月20日 (25文財第1434号)			遺物の発見通知日		平成26年5月29日 (26文財第265号)

筑後国府跡—第277次発掘調査報告—

久留米市文化財調査報告書 第353集

平成27年3月31日

発行 久留米市教育委員会

編集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

印刷 中村印刷有限会社